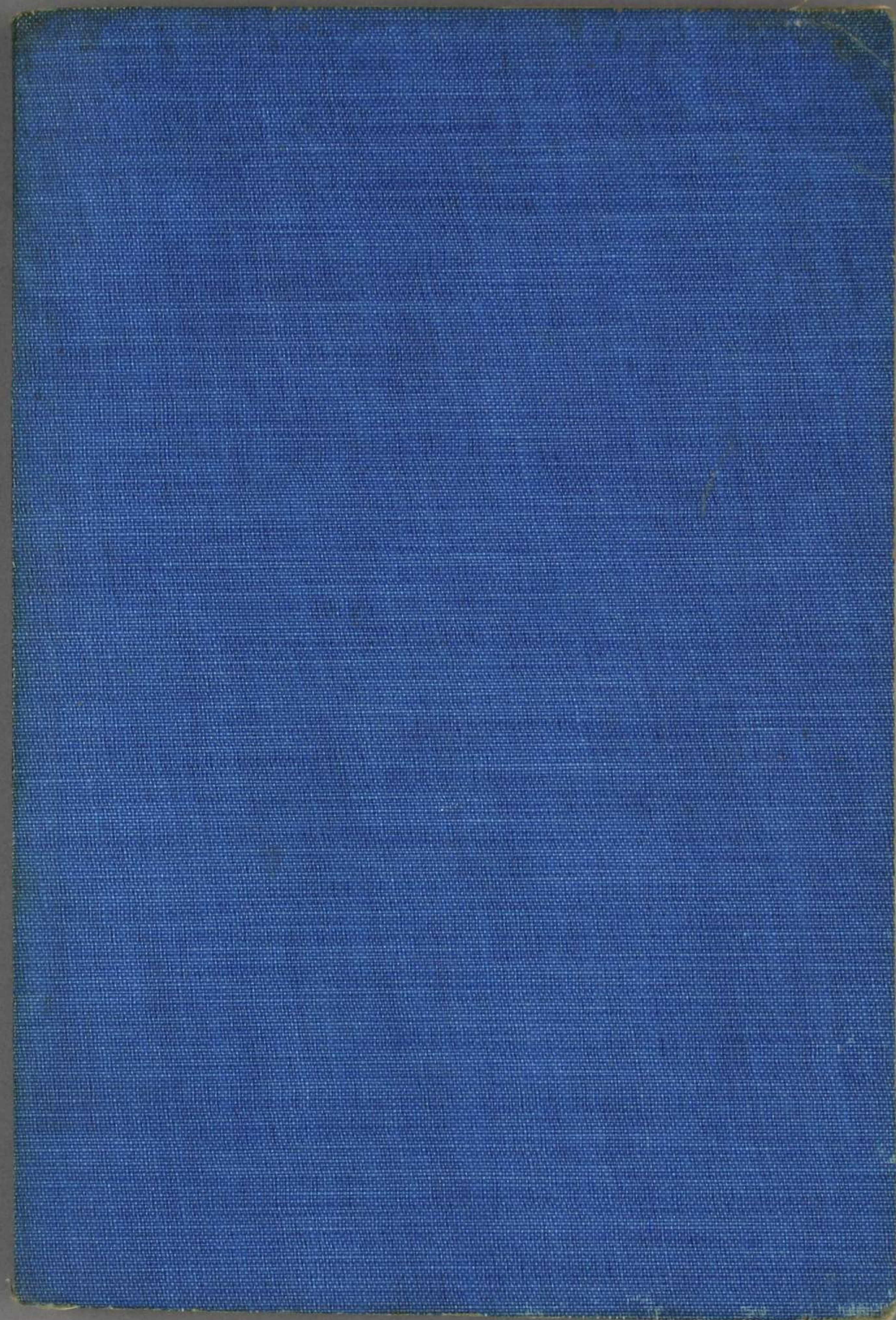


大
日
蓮
華

大
日
蓮
華

山
崎
紫
江
著

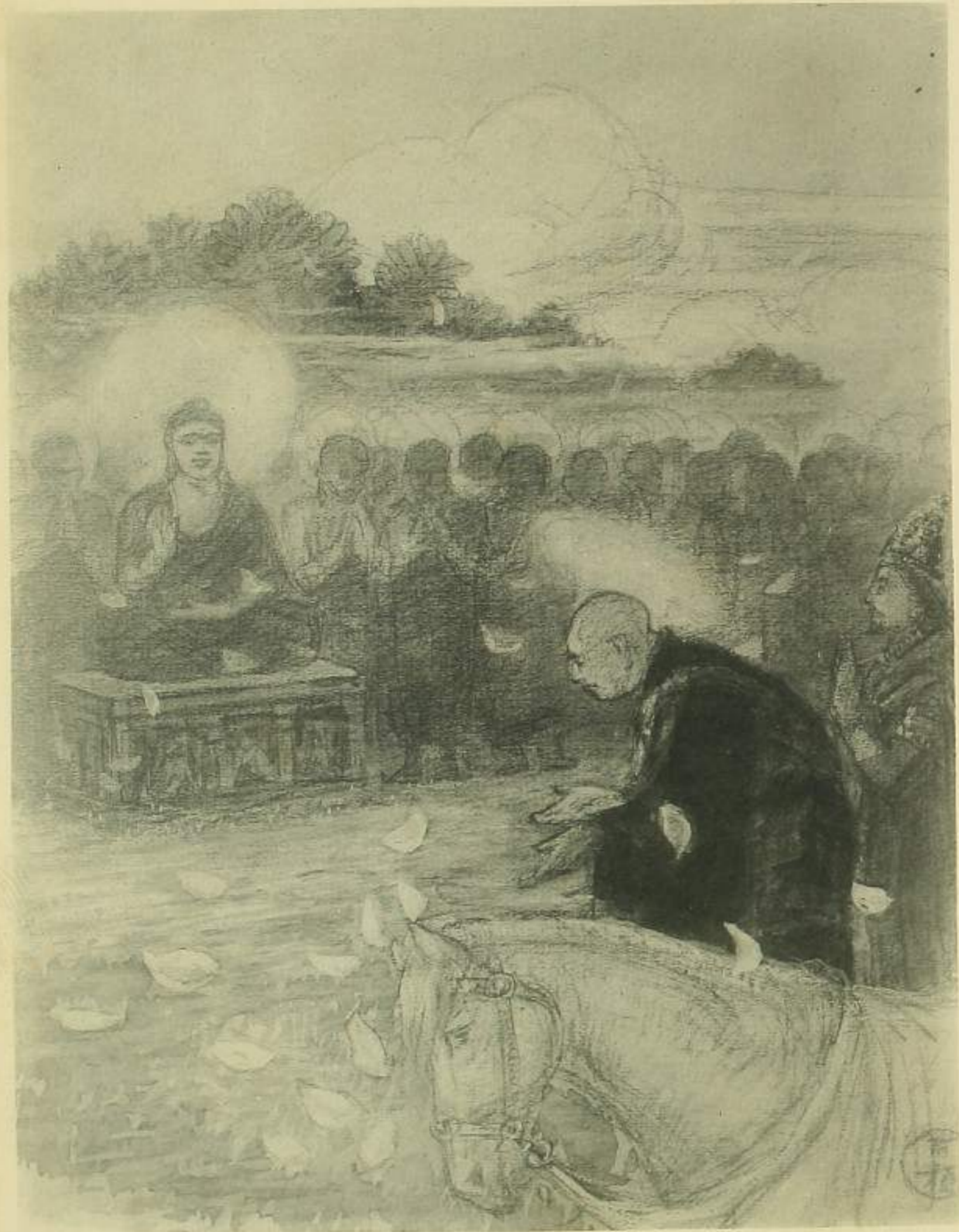




法華詩篇
大日蓮華

山崎紫紅著

小島久太氏に捧ぐ



小島久太氏に捧ぐ

この書は小生が作詩の墳墓だ、收むる處のものは數年間の製作の中から擇み出したものだ、作詩の數は百餘もあらうが、選抜したものさへがこれであるから、選外のもの蕪雜なのは云ふまでもない。現時詩壇の進歩は非常なもので、到底小生の如きを作詩家のうちに算入し置くほどに寛容なるものでない、これ小生がこの墳墓を築いた由來である。卷頭に置いた『常在』は巳歳の秋から未歳の春にかけての作で、ことは日蓮聖人が娑婆の教化を終へて本師大聖釋尊へ降魔の大捷を還告する一段である、願れば小生が詩界に於

ける生命は過去となつた、小生にはこの報告をなすべき時
が永久に失はれたのだ、小生は小生の墳墓を抱いて無限の
感を生じたのである。

二

著 者 記

大日蓮華 目次

| | | |
|------------|-------|-----|
| 常在 | | 一 |
| 地獄の巻 | | 一一二 |
| 難風 | | 一五七 |
| 始めて佐島を望み見て | | 一六八 |
| 片瀬の濱に樗牛を思ふ | | 一七二 |
| 附録 | | |
| 松の歌 | | 一 |
| 八ヶ嶽賦 | | 七 |
| 烏龍嶼 | | 一一 |
| 自然の衣 | | 一四 |
| 盲 | | 一八 |

一

| | |
|-----------|------|
| 吸筒 | 二二 |
| まだ見ぬ藤のさかり | 二三 |
| われのみ古し | 二五 |
| 劍のかけ | 二六 |
| 燕 | 二八 |
| 舟は焼けり | 三〇 |
| 盲の妻 | 三一 |
| 里ばなれ | 三三 |
| むしろ地獄に | 三五 |
| 木曾殿 | 三九 |
| 頼朝落馬 | 四五 |
| 通計 | 二十一篇 |

大日蓮華



山崎紫紅

常在

於阿僧祇劫、常在靈鷲山、及餘住處、
 衆生見劫盡、大火所燒時、我此土安穩、
 天人常充滿、園林諸堂閣、種種寶莊嚴、
 寶樹多花果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、
 常作衆伎樂、雨曼陀羅華、散佛及大衆、
 (如來壽量品)

第一の巻

是かの如くに我は聞きにき
あるとき世尊靈鷲にあり
この御山は世に所謂
靈鷲山にあらすして
地下を距ること幾億里
百千由旬の空をへだてて
凡人は西南東北
その方向をだも知らず

源香齋文集

立廻らせらる峰の頂
佛の御手を立てたる如きが
穂末はなれば雲に入る
その山浪のひとつびとつ
頭鳩羅纏ひし羅漢衆の
肩ざまなして連れる
始は霞末は霧
日に燦きて黄や紅や
七つの色に誇りては
あさあさしさを花に競ふ
麓に水を湛えたり

水はもとより色なけれど
わけてこはいやましに
澄むが上にも澄みたれば
微塵の影かくれてなし

されば棲みける魚のさま
黒きが走るは阿蘭陀の
文字を水底に描きたり
赤きが躍るは花に似て
牡丹を水に咲かせたり
蓮華に備き蓮の花は

汀にちかく咲き亂る
蕊を圍める花瓣は
傘より廣き紅の
一片を探らばらうたげの
あまつ乙女の裳ともならむ

白きを水に浮めては
神より聖き垂髻兒の
川道遙の舟館
行方も知らず流るなる
岩の影より水湧きて

煙の如く流れ行く
漚にたちて一葉を
波に任せて去すとき
早かれかすと見る折は
くるくるとくるめきて
うたかたと消えゆくも
緩かれと念すれば
葉面に刻める文象も
歴然と漂ひぬ

その水の不思議さよ
渉るに足を潤さず

暑き夏は氷のごとく
寒き冬は湯のごとし
冷熱は意に任せ
滑やかなること珠に似たり

二

一座の巖ありて
其上に御座を構へたり
御座の高さは無量にして
立ちて對へば御足を仰ぎ
坐して拜せば御胸を見る
巖を築きて對ふときは
座石の丈は彌高に

段に上れど誰れありて
世尊と高さを等しく爲し得ず

大聖世尊寶座に立ちて

妙法を講じたまふ

法王の威儀獅子吼音

遠きに明かに

いかなる難解の品たりとも

手の文見るより易く聞えし

數多の菩薩摩訶薩
各蓮華の臺に乗り

御手を合せて妙文を誦す

聲明の規矩明かに

或は黃鐘或は盤涉

松風の鳴るが如く

頻迦の囀るがごとし

霧の音、谷の響

雲の聲、風の色

いづれか佛性ならざらむ

その時佛忽ちに

誦したる經を止めたまへば

大衆の合唱亂れぬ

蝕に入つたる日の下に
光の行方を尋ねやはする

牟尼佛空を見やりたまへば

繽紛として降る華や

香は空に充ち渡り

目も紅に染みなして

大地刹那に錦と變じつ

牟尼世尊其時に

御手を舉げて大空を

微笑みたまひ指させば

化現に臆ちし菩薩達

恐怖の相を面に現し

眼を瞠り口を開き

佛意を悟りし者なかつし

三

さそと笑ませたまひ

暴らかにおん膝を

打ちませば竿の様なる

黒雲すつくと立つよと見えしが

池の面に浪逆立ち

電光激しく雷火霆めき

雲間に立ちたる大蛇の姿

七つの首を振り立て振り立て

寶座の御前にだうと坐す

舍利弗進み出で

この龍は何處にすまふぞ

八大龍王恒砂の眷屬

皆御前に伺候して

我眼に觸れざるものは無きに

七つの首を傾けて

七つの石に枕して

蟠れるは異相かな

願はくは大聖世尊

我等の爲に此龍神の

過去遠遠を説かせたまひ

疑を晴らしたまへと

懇に乞ひ申す

佛はなほも語りたまはず

御手を胸に推しあてて

唯文殊と呼ばせたまふ

舍利弗眉を張り

世尊文殊師利王は

此座におはさす候よと

いふ言いまだ畢らざるに

南みなみの空そらより獅子ししに騎またし
風かぜに乗のりじて強弓つよゆみの
精手てがはなちし矢やのごとく
参まゐりて御前ごぜんに畏かしこまる

あゝ師利薩陀しりさだいかばかり
御身ごみの來きたるを待まちしとするぞ
この龍神りゆうじんや知りたまへると
問とふ舍利弗せりぶつの面おもてよりも
世尊よせそんの顔かほを見みたてまつれば
口くちの邊へに笑わらを湛たへて
知しれりや語かたれと促うながしたまふ

師利文殊しりもんじゆその時に
十大弟子じふだいでしの一人ひとり
阿那律尊者あなるとんじゆを招まねぎつつ
いかに尊そん者じゆ
御身ごみは阿羅漢果あらかんぐを得えて
六神通りくじゆんづうに通つうじたまへり
恒砂こんさの如ごとき御弟子ごでしの中なかに
天眼てんげんに於おては
御身ごみに優まさる人ひとあらず
大千世界だいせんせかいを天眼てんげんに
淨玻璃じゆんはりの如ごとく瞭みりたまはば

此龍の本地、本性
または降華の奇瑞の因を
我に代りて語りたまへ

阿那律いはく師利薩陀
我れこの大蛇を知り候はず
知らざる者は大衆なり
知りたる者は師利王なり
されば御身は召されたまひぬ

いなとよ阿那律
待けばに芽は生ふ

撞かぬ鐘鳴ることなし
目前の不思議をもて
ただ目前を見て止みなば
天眼は水母のそれか
右を思はば左を詠めよ
前を望まば後を觀せよ
大千世界に不思議は無きか
三界にただ此龍のみを
御身の眼に奇しとや見る

阿那律聞きて跪き
あわ文殊師利菩薩

我が愚さを笑ひたまへ
 われいま宇宙を觀すべしと
 身を捉すれば七多羅樹の
 梢よりなほ高に
 四方を眺めて怪訝の
 眉を擧めて語るやう
 愚禿既に正法を聞き
 謂へらく三界十界
 思議以て及ばざるなし
 禽獸魚蟲の聲
 草木土砂の形

悉く皆、佛性
 水の滴、雲のちぎれ
 熱き火、冷たき水も
 その本地本性を
 觀じたる月日
 積りて茲に二千餘載

いま南閩浮提州の東に
 一座の紫雲搖曳し
 妙なる光を虚空に放ち
 光の線は地を徹して
 底に潜める泉を照らすも

その原は燦めきて
雲中にもものを見ず

疑は雲にかかれ
我眼光は彼れに奪はる
願はくは説きたまへと
身を俯し肩を地に著けて
憐みを面に浮べ
文殊に請ひ需むれば
いやとよ尊者またしませ
われ舍利弗に問ふことわりと
青獅の項を撫でたまへば

頭に戴く金毛を
一とゆるぎして立上る

舍利弗はこれを見て
観念の眼を開き
文殊王に向ひて坐しぬ

文殊のいはく
いかにや舍利弗
御身は無上の士
調御丈夫天人師
さきに記別を蒙りては

華光如來と名乗りたまふ
 娑婆に於ては佛大弟子
 智慧に於ては究竟第一
 同くは宇宙を觀じ
 奇瑞の基を諦めたまへ
 いかによいかにと勵まされて
 恐る恐るに語るらく

師利薩陀吾が申事を聞きたまへ
 我れ觀念の眼を開き
 四つの世界をつくづく見るに
 玲瓏として明珠の如く

眼光大地の底に透す
 唯南閻浮州に
 薄くして小霧の如きもの
 鏡に浮べる雲のちぎれの
 僅かに眼を障るあるは
 これ阿那律の怪しむところか

小賢しや閻浮の人人
 二を論じ三を議し
 佛を蔑し神を疑ひ
 我れは得たりと人に語るも
 ただ一度の終焉に臨めば

逃ぐるに道なき巷にさまよひ
生死の際を免れ得ぬ
有漏の様こそ悲しけれ

深大の道をしらず
土砂を叩きて理を論らひ
草木を剖きて學を衒ひ
眼の外は道無しと云ひ
心の及ばぬ境をしらず

それ一念は三千
三千の念九百萬

洪濶宇宙の大を忘れて
眼前の境界に往來し
たまたま享けし人界の
有限の齢も白の目と
磨り減らし行くおはれごよ

菩薩よ
佛地には譽なし、恥なし
知らざるは知らずといへ
知つたるはな包みそ
説くを惜まば慳貪に坐せん
知れるを隠すは偷盜の罪と

勢ひて責むればかやかと
晴れやかに笑ひて文殊

やをれ舍利弗

その心ゆるにこそ

正しき小霧の體を知らず

また阿那律も光明の

因を知らぬは理なれ

われ牟尼世尊釋迦佛如來

三界の教主に代り

いで光明の糸口を

大衆の爲に示さむ

舍利弗よ、阿那律よ

大衆も聽きたまへ

螻蛄は螻蛄の世界を知り

獸は獸の世界を知るのみ

六尺の大にしていかでかは

丈餘の人の垂頂を知らうぞ

大衆の眼の低ければ

高き佛の立ちたまへるも

半身をだに見る能はず

天文の博士が星座を知る如く

三界の菩薩が本位を

知了せる羅漢阿羅漢

知れりや知らじや

世には不思議なきか

不可思議なきか

超凡の理はなきか

想絶の事はなきか

無量の義はなきか

無邊の妙はなきか

五

三千塵點遠遠の事

これを約して天眼も知らず

智慧も知らず、神通も知らず

空には寶塔浮湧し

莊嚴七寶玻璃の御座に

いまだ知らざる如來を見ざりや

大地よりは三千の菩薩

春雨の後の若艸の

萌えしが如きに驚かざりや

正法の時こそ力あれ

像法の時こそ榮あれ

今萬年の末法
遠く流るる恒河の末
柵無小舟吾れは及ばじ

大船來れり、大船來れり
衆生を助くる船は來れり
法の柱來れり
破邪の勇士來れり
降魔の將軍來れり
末法の魔縁を度して
上行いまや歸り來るぞ
各出でて迎ふべしと

文殊自ら師子の座を
放れたまへば大衆は
或は花の臺を出で
或は雲の褥を出で
湖の周圍に立ちならび
偈を作りて同音に
唱誦したまふ有難さよ

妙なる法を説きしとき
つちの中より顯れて
付囑をうけしみほとけは
また地の中へ入りにけり

ものは失せざる者なれど
この御佛はたれありて
その來し方も聞かざれば
まして行方は知らざりし

空とぶ鳥は巢にかへり
花さく蓮は實を結ぶ
すゑの世、ぼさち出でざれば
世尊の言は違はん

うれしやここに上行の

かちどき高くかへりくは
妙なる法の妙にして
譎なきをあかしたるかな

第二の巻

我れは是れ毘沙門天王
須彌寶山の四層に住んで
沿く世界の禍福を候ひ
善に與して惡を虐ぐ
あらずる邪正を耳になすより
多聞天とも名けられたり

いま天上の六十餘日
人間界の六十餘年
正法末世に出現して
奇異の光を東海の
曙の霞の間
三十三天、十八地獄
光り充ち満つ昨日今日

不思議や哭声天に聞え
薄墨の霧空を鎖す
軒も垂木も光を失ひ
太柱動き揺らぎ

寒風肌を撃く
これ唯事にあらじと
踏鞴を踏んで立上る

水晶宮裏鳴動して
顯はれたまふ多聞天
矛提げてたうたたら
世も碎けよと走り行く
空と空とを分ちたる
雲の峽より詠むれば
死の色浮かぶ下の世や
嗟日蓮は死してけり

骸は魂と放れたり
いざや此由奏せんと
蒼天に飛上り
君の宮居を訪なへば

金銀碧瑠璃琥珀硨磲

七寶を鏤めたる

玉の寶座に帝釋は

朝政おごそかに

威儀を繕ひ待ちたまふ

いかに君

二

上行菩薩娑婆を去りぬと
奏すれば
帝釋天王 領かせたまひ
さればなり
王達は御輿を昇いて
おん迎に
急ぎ参られ候へかし
吾も後より
續かなむと宣ひて
丈の御身を
つと起して立たせたまふ

毗沙門急ぎて須彌天の
四層に飛來し大音に
いかにや西の廣目天
東の持國天王
南の增長王
君の仰せぞ娑婆に下り
上行菩薩を迎への賦役
急げ急げと輪の如く
刹那の間に二三遍
須彌山の腰を旋る
東の方にかがやく

金色の主を見れば
黄金の鏡、黄金の兜
身を鎧ふたる持國天

南に增長天
きらめく鎧は瑠璃絨
波の上色白泡の
沸だつごとき御粧

西の宮居をあららかに
扉引開け廣目天は
肌寒げなる銀の

兜の目庇引上げて
事事しや多聞天
何事さうと目を開き
見造る光の映り添ふ
鎧の袖の美しさ

耳は鋭けれど眼は聾ひとつ
あざみ笑へる多聞天を
よしと呪へ、下界を詠め
けうとき聲を振り立てて
や、や、日蓮は娑婆を去りに
上行歸り來るぞかしと

教ふる様のをかしやと
一度にどつと笑ひけり

三

圓なる眼を彌圓に
何を笑ふと眞顔して
詰り問はうと氣色だつ
廣目天を押止どめ
二天はひとしく語を揃へ
いやとよ耳に勝たれたり
多聞は既に昇り來し
玉の宮居に救を受け
かの摩訶薩の道知べ

四つの肩に玉の御輿
客を据ゑたる天路の旅
雲井を渡る雁金の
列を亂さず急ぐべし

急げや急げ遙なる

人界の階を

はや一足は離れたまふ

遅れて不興蒙むるなと

金銀碧瑠璃水品に

光りかがやく御輿の

前の方には持國廣目

後には多聞増長

推せや飛ばせやえいさらさ

須彌山を躍り出で

翔けれやはしれさらえいさ

雲路の波を走りつつ

娑婆と冥路の境なる

夜見の關戸につきたまふ

第三の巻

何事ぞ、何事ぞ

光うすれゆく

うずるるは春の光
罪の上にも暖かき
恵を與ふる春の光

鱗の淵を照らしては
悪の氷を溶ろかし
次第に業を宥むる故に
盡くるとも無き長の上に
一縷の望を寄せたり

いま光消えんとす
こはそも如何なる事ぞ

地獄に來れる破壊
鐵城に來れる墮落
思ひ遣るも悲し

罪の底に沈み
骨を刺す八寒の青き火
紫の煙、黄の焰
目には火を見て物を見ず
火てふはあれど物を照らす
光とてなき泥犁

光ありて苦も

幾千を滅したる思

鐵の丸を食ひ

銅の汁を飲み

骨を碎かれ髓を抜かれ

呵責に間なき八千歳の

身にかかる苦は厭はねど

光なくて見えぬが悲し

多くの罪人が

諸聲の唸きの

王宮に入りて閻魔王

訝かしや罪人の
悲哀の聲の心に透るよ
幾百億の囚はれ人
日夜を絶たず鳴を揚げ
罪を叫びて止むこと無し

嘆きには我耳聾ひたり
號きには我心鎖ちたり
哀傷の聲悲痛の叫びよりは
蜉蝣の羽音こそ高けれ

その聲は己を駭く

無辜を云ふのみ
その叫は身に掛る
苦を呼ばはるのみ
邪見の放つ獵矢の
いかで心に中らうや

然るに、然るに
奇しき叫び、こはそも
いかなれや、怪しと
俱生神を徴す

御前にと奏すれば

大王の宣まふ

いま分きて四人の
嘆くはいかに

知らせたまはぬか
上行菩薩
東を去りたまふ故ぞ

訝かしや
深罪の悪徒
朕も知らざる闇浮のさまを

いかにして知れりやと
詔みことりあれば俱ぐ生神しやうじんは
頤おとがひの鬚ひげを撫なで
鶴つるは雀すずめの住居すまひを知らず
雲居くもゐに在おほせば
沈獄ちんごくの徒との有様さまを
詳ららに知しらせたまはぬは理ことわり

それ天上てんじやうの一日いちじつは
下界げかいの一年いちねんなり
下界げかいの一日いちじつは
地獄界ぢごくかいの一年いちねんさふらふ

この程ほどより地獄ぢごくの上に
美うつくしき光ひかりさす
黒霧くろきりの煙けむりの中に
臙おぼろのごとく見みえたまふ

この光ひかりりを拜まがむときは
暫しばしくは暖ぬるを覺おぼえ
暑あつきものは涼ひやうを催もよほす

呵責かしやく、罪つみ、悔くはの外ほかに
何事なにごとを知らず

安樂の外に
何事をも顧はざる罪人
この光に渴仰の
讚嘆を絶たす

斯光明は摩訶大菩薩
御誕生の曉より
二萬千八百餘歳にして
妙の光いま消え去ると
はらはらと涙を流して
悉しく奏せさせたまふ

閻王御膝を礎とらつて
不思議なんと
いふも愚かや
それよ人界を放れて
面會の期またあるべいやと
端近く出でませば
五道冥官八大地獄
牛頭馬頭惡鬼阿呆羅刹
御跡より随ひ行きぬ

第四の巻
昏きが中の黒霧の

薄るる間の夜見の門や

閻王は佇みて

厭離の苦土も

上行の在すにと

訴へ顔にて鳥鳥の

闇にかがやく御相や

娑婆の往來を見遣りては

結縁の有難さに

合掌して待ちたまふ

直道には四大天王

玉の御輿を据置きて

轅の下に畏り
世に珍らしき旅人の
來るを遅しと待ちたまへば

折しも遠に微妙の樂

四つの調や八つ拍子

琴の音、篋篋の音

聞き覺えたるすさみやと

面を誘き天王達

わと云ひさまに平伏すを

戸影に候ふ閻王は

なでふ鳥詩の振舞と

見遣りたまへば大紅蓮の
雪より白の駒に乗り
雲路にかがやく天の主
喜見城を立出でて
雲の林やしんづしづ
真金の轡のきらめきに
面まばゆき天童の
前なるは口を取り
後なるは若菜色の
紋紗の傘を捧げ
扈從したる前後のつらには
數の旗、數の鉾

または隨身
陪從の官人
望の夜の潮と湧くに
知つたりな帝釋天の
下りさふと左右を顧み
宣らせたまへば冥官等も
衣冠を繕ひ威儀を正し
南の客來りたまへと
待つやその時

あら海のどよみ
鳴り響くよと

思ふ間に地震す
輿の金鈴搖ぎて
鳴り久に止まず

娑婆に奇し光

水晶の煙立ち

仇し野を照らせば

千草は瑠璃と變じ

大地は七寶を彩る

いまその道を歩み來る
人こそあれこは是れ

如來の使、法華の行者

日蓮てふ沙門なり

香染衣よれによれ

茶色地の御袈裟は

襜ばかり正しう

無下に破れたり

瓦礫を貫きて作れる珠の緒

傷つける杖木を御手にし

尺度のごとく來たまへる

御足の跡には一つひとつ

青蓮華咲けたり

帝釋急ぎ馬を下り

一足は紫の雲

一足は紅の雲

たたらたたらと雲を踏み

御前に畏るを

垣間見の冥路の王

あら怪しからずの會釋やと

思は同じ四天の臣

未曾有なれや阿僧祇劫

那由陀を重ねて今に見る

過分の卑下さまよ

我等いかにして

貴人を待つ儀を

顯はすべいやと顔を見合せ

額をあつめて考への

大路には例の光

面を射たるまばゆさに

思はず額を大地に付くれば

厳しくよるへる鎧の總角

紅紫の色彩の

映りたるあでやかさ

帝釋の聲として
 末法の導師菩薩
 牟尼佛世尊の御許へ
 御送りの玉の輿
 醜けれど我が料に
 召させたまへと詔あれば
 日蓮はつつましげに
 げにや地涌のむかし
 値遇申したる帝釋天王
 切憫天の御主たる
 尊き御身をもて
 粟散の邊土、日本の小沙門

日蓮の御迎とや
 忝なし、こもこれ
 經を持し奉る
 功德よと御涙を
 はらはらと流したまふ

四天王は輿の戸の
 蘇芳簾を引上げて
 いざ召しませとすすむるを
 旃陀羅の子が何しにと
 辭ひたまへば力なく
 帝釋は先に立ち

馬輿は後に從ひ
梯かけし雲の林
多羅葉の潤き葉の
錦とちりしく阪路を
辿らせたまふ御行方を
見送り申し閻王は
幸ありし今の月
今の日のうれし
化現のさまの大菩薩を
そのままに見し有難さよ
綺羅を競ひし野花の中に
ひともと交る穂長の薄

雄雄しくも抜きんでし
大威儀に近づきたりと
過ぎ去るあとの道の邊の
砂をとりにて一つかみ
鐵城に投げ入るれば
業火に入りては凍氷となり
業水に入りては炎火となり
地獄界の三日は
百花ひらき百鳥囀り
寂光の土を現せり

第五の巻

釋尊茲時に

大肉髻の妙光を

さと放したまへば

あれ見よ

麓の方にあたりて

一羣の人衆

命命鳥すむ根無し松の

常蔭の中に顯はれたり

亂立つ岩は水晶の

鏡を植ゑて映渡り

岩はそのまま岩ながら

真相を透して繪けるに

會下の菩薩等聲聞衆

こや上人の歸り路と

首を延べて見てあれば

今更ながら帝釋の

綺羅美やかなる姿やな

金銀の光鋭に

身を掩ひたる前後左右

四天王を始として

種種の伎樂の俗人の

爽朗なるに引きかへて

木綿墨衣なへがたの
袈裟吹捲くる山嵐
見あぐる嵯峨の通路の
巖の上を清むれば
山祇は角を削り
岡象は砂を荷ひ
まめ立ちて稼ぐ

その時牟尼佛の
膝下に伏したる七面の
大蛇はうめき出で
紅の舌を吐き

ひと動き揺らぐと見えしが
倏ちにその長百由旬
金色の光を放ち
中身を尾上にかけたるが
尾は異峰にあまいたり
首を傾け何事か
願ぎ需むるを見そなはし
金手を延べて撫でたまへば
鬣生じ蹄生ひ
角消えて馬と化しぬ

この馬立ちて高嘶きし

如來を拜すること三度
雲間を踏んで岩間を驅り
遙かに山下に奔り行くを
怪み怪む菩薩達
その行方を見送れば
松の緑をわたりては
石南華の萼を歩み
岩高蘭の氈を分けては
駒草を虚空に咲かせぬ
日蓮の御前に
前足の膝を折り
鈴の眼は物を云ひ

待ちかけたるに上行の
ものいふ様の聞かま欲しと
佛佛は耳を立て
蝶の羽音の通ふほど
静まりまして八千の
耳根は共に麓路や
かの一行の邊に延びぬ
日蓮いひけらく
天の主よ聞しめせ
娑婆の宿縁深ければ
行先を護る龍神の

誓をばたす來迎や
化身の龍馬ここに在り

なかなかに
乗りぬはかへりて情なからむと

跨りたまへば立あがる

白毛に青海波

新潮渦巻く腰のあたり
しんづしんづと花を踏む

駒の足どり軽やかに
木根をふまへ岩角を
渡る氣合に帝釋は

舍人を近う呼びよせて
我れも御料の馬に乗る

尾上には菩薩達

はやはや來れ末法の
導師に親しく値遇せんと

なほも誦します梵唄の
いつかは人の世に流れ

この唄聲を聞くものは
安らげく健康に

愛を忘れこの世から
寂光の土を見ると聞こえさ

第六の巻

をひや、をひやり
ひうやらり、をひやりらり
そよや喜見城ふり
笛の音の近きは
来たまふめれや上行の
一の使命を果しては
如來に復す凱旋の
式見まほしと四種淨土
佛乘緣覺聲聞衆乘
天乘梵乘八部乘

堤潰えし洪水の
溢れしやうに推寄する
折しもあれや樂の音の
をひやり
ほうほうひり
たうたうる
松蔭に幡見えて
前列の樂人
なほ吹きすます
ひうやらり
紫句の綾衣

皆一様に著なしつつ
手に手に簫笛篳篥琴鼓
秘術を奏し廣庭を
過ぐれば續く警衛の
非常を護る天の臣
幡も鎧も紫の
たとはば夏の初つかた
藤棚かけし大池に
申刻さがりの太陽の
光を浴びし水の面
かがやくさまも長閑にて
心溶くる樂聲や

夢の華踏む天路には
暫の間に煌煌と
光は目を射つ花を射つ
望を籠めし紅の
その一羣は現はれぬ

とんどや、そよや
ららりどら
住吉の松はめでた
神樂の笛鼓
たうたうたらり、ちりや

音響ひくる中空に
最先に立ちし樂人の
牡丹をつけし天冠に
薄紅梅の挿頭して
鬘を分くる鬘は
緋の生絹を用ひたり
顯紋紗の紅袍に
同じ色の大口穿き
山吹の花輪を腕にかけ
そよや、ららりとそそり來る

百華さかりの御苑生に

よきを加へしあてやかや
感を重ねし興がりの
涙は落ちて芝艸に
新らしき花と咲きぬ

奇光鋭なり
すはやと色めく菩薩聲聞
來りしぞよと首を延べ
その後列を見てあれば
近まさりする帝釋の
兜の星は白く照り
鎧の胸板弦走

黄金まばゆき草摺を
ちりりちりりと鳴らしては
真紅の手綱緩やかに
打たせたまへる其後に
續ける勢をうち見れば
長月末の公孫樹葉の
日中に照れるきららかさ
袍も半臂も黄金散る
黄染の羣の霞みけり
雲立涌の穀織の
ふはらふはらと戯むる
風心地よき頂さに

そ。上行の在したり
化龍の馬に跨りて
破れたる御衣は召しながら
わろびれたる氣色なく
大場さして来たまへば
見そなはしたる釋尊の
面は喜悦を漲らし
目は満足を表はしぬ
其時諸天震動し
瓦礫降り来て雨のごとし
雲もなき霽れ空に

怪有なる氣色かな
及ばぬ業に身を苛ち
第六天の魔障かと
持國增長廣目多聞
矛を提げ雲を起し
天翔けらんと立ちたまふを
止みねと喝す御佛の
師子吼の聲に百獸の
習き伏せるごとくにて
噴恚の念を翻へし
馬上におはすおんさまを
見奉れば不思議やな

續紛たる瓦石は
御身體を打つと申せど
その石反りて花と化し
鬚に咲き袈裟に咲き
蘇曼那の薰優鉢羅の
花花しさに呆れては
我れと合ひつる掌
報謝の念を催ふせり

その時上行馬より下り立ち
牟尼佛の御前に進み
禮したまふこと三度

佛座をすこし隔てつ
退りたまへば大仙の
金手の指のさすところ
地より無色の巖生ひ
金剛の寶座をなせるに
登りたまへば大會の衆
芬陀利薔薇菊櫻
手に手に花を捧げたり
花の花咲く座のあたり
花の香に酔ふ日の光
天の榮を集めけるかな

第七の巻
舍利弗は進み出で
いかにや菩薩
娑婆の戦ひ事終り
凱旋の晴の日
二千二百の年月を
重ねてここに新らしき
對面さうに御袈裟の
あまりに破れて候ふよと
誇顔して啓するを
苦氣して文殊師利
止みね尊者

大命を受け大事を爲すに
刹那ほどの暇や候ふ
まいてや是れは武者装
戦場の姿ぞかしと
示したまへば舍利弗は
智慧第一の光明も
この御經には遮へられつ
止なむ止なむ慢心やと
我と我手を燃りては
面を根め心を冷しぬ
如來は掌を合せ

いかにや上行摩訶菩薩
末法の世の法戦の
物語あるべしと
大梵音を轟かせば
上行もまた合掌し
恠顔して四邊を守りぬ

時に湖の水入り
昇ること數十丈
傘のごとく、塔のごとく
白銀の空に撒く
四の虹、八の虹

彩の空に忽焉と
七寶の大塔浮湧す

文殊普賢觀世音
彌勒帝釋四天華梵
あらゆる佛一切菩薩
奇特なりや多寶佛の
出現をまた拜むことよと
歡喜の涙とどめ得ぬ
渴仰の掌
億兆の大群は
皆ひとさまに大地に伏し

頭を摩りつけて讚すれば
塔の扉うちより開け
いまそかりし御姿の
大慈の寶手をさしのべて
大雄世尊を招がすれば
釋尊は御空を踏み
かの寶塔の中に入り
傍につと坐したまへば
文殊菩薩坐を放れ
塔を仰ぎて請ひけらく
吾れ文殊今月今日
再び多寶の塔を拜し

また凱旋の大將を見る
願はくば大聖の
御加被をもて將軍の
戦ひのさまを聞かば

その來往は不思議にして
三世知了の菩薩だに
光の霞に通力の
威徳をさへに遮られ
ひとり世尊の金精眼の
本末究竟を讀まれしのみ
望むらくは速かに

佛勅を下したまひ
會下の大衆に満足を
たばせたまへと啓上す

多寶にあらす、釋迦にもあらす
塔の中より聲出でて
善哉善哉上行菩薩
いまこそ説かせたまへ
とら語りたまへと
のたまへば上行
勅を受け佛子上行
末法娑婆世界に出で

唯一の眞を布く

法は峰に照るなれど
麓に茂る根曲笹の
道を迫さては雲霞
霧に狭中を包まれて
左右を知らぬ旅人は
崖道に落ちて三悪の
深き谷間に叫ばひて
永久冥闇の墓に入る
御故郷をうかがへば

冬枯空のさみしさや
百葉落ち百艸枯れ
正法の跡滅しぬ
支那地には像法の
験に残る塔閣は
松のあひだに隠見し
鐘の聲のみ昔にて
夢愕かす人もなし
惡毒の瘴氣は
四つの海に満ちわたり
一天の下いづくにか

まづ正法の種を下さむ
ここに日本國といへるは
粟散の小土ながら
南に起り北に延び
長きこと一干由旬
東海に地を占めて
水を航るに能き利あり
まいてやその國土香ばしく
四時不斷の花を飾り
北海の草も咲き
南極の木も華けり

天を限れる高き山は
國內に立ちて南北の
堺をなすに諸の
穢れは直に海に入る

御空を焦がす渴仰の
山に不斷の火の柱
風に倒れて黒白の
班を天に染めなして
百草さゆる裙野邊の
寂莫を破る天の聲

かかる煙の雲となり
または南の暖かき
大氣のさつと襲ひては
やにはに變る空のいろ
雉子は草間に身を潛め
ほろほろほるとなる神の
おどろに怖ぢて災禍の
夜の明くるを待居たる
嵐はなほも凄まじく
富貴に誇る枝を折り
驕慢相の幹を倒し
技工に傲る人間の

楔を緩め釘を曲げ
かららに笑ひさりさりや
さりりと語りてわが牲は
何處にありや何處にと
鳩の門口を襲ひうち
鼠の通ふ途に迫り
舊きものには新らしき
命を送り香を送る
國は嵐に洗はれて
きはやかしさに輝さぬ

もし春されは野といはず

山といはず人里の
折掛塙も花さきて
天地を包む百の華
霞の幕を旭日に張る

世尊なほ聞かせたまへ
此國に奇異の事あり
神の末の在す
國を闢きて二千餘年
その血を傳へ國居して
常安に安かれと
民を治め世を治め

一統を天下に誇る

われはこれ眞の使
大法二あることなし
一系の天子は法の姿
面白や、髣髴たる

額に笑を湊めては
説去り説止む樂相を
見入せたまふ釋迦佛は
よきかなよきかな汝上行
地を相するも巧者かな

我佛説きつる大法の
大乘はただ止まりて
かの東海の小土にあり
是等をば皆既に知んぬ
ただ東海の漁夫に
胎をかりたる事の由を
語らせられて大衆の
胸の氷を解きたまへと
言葉なかばに上行は
あまさがる鄙び里や
安房の小島に鯨突く
海人に宿りし不審さうとや

われが菩薩か、かれが菩薩か
これ程の道理を
問はせたまへる笑止さや
末の世心僻めり
勢をもて民に望めば
その心涙れ歪みて
吳竹の直なるなし
賤しきが抱くに
真はいよよ大なりと
答へまをせば大衆は
南無妙法蓮華經と

慙愧の涙つきませせて
誦題に時を移したりき

第八の巻

したりやしたり
野干だも偈を説くときは
帝釋の師にてありけり
法を説く海人の子の
など三界の師ならざるべき
人の胎を安房に享けては
御邊すでに上行にあらす

鯉魚つる漁夫の
小悴は濱に出で
出る日の光を浴び
暮る日の潮に染む

蚕人には
才弾けたり、せめて世を
望めとて僧にはなしぬ

知らじや知んね清澄の
尾上に月の清きとき
雅の木蔭に新發意は

八重雲立つを觀じつつ
無礙實相のおよびなき
佛智を宿れと祈らざりしか
笹の上へに吐く凡血の
醜みだきはさながらの
魔性を直ひたにあらはしぬ

あやうきかなと牟尼佛の
小さき息を耳みみさとく
舍利弗はうけとりて
聖せいなる上行じやうぎやうに
魔縁まゑんありやと疑うたがへば

鯨いさなこそ大海たいかいにすめ

悼たうましいいかな菩薩ぼさつ達
救世きうせいの悲願ひがんのさまざまに
輪廻りんじゆの浪なみに漂たふふは
大覺だいかくの帆ほをかけず
苦海くかいを航かうる舟ふねのごと
毗藍ひらんの風かぜにうきしづみ
誓ちかひの網あみに憧あこががるる

われを知れ
われを覺りて佛ほとけ生まれぬ

帆を張れ
帆を掛けて舟は動く

汝、日蓮

眞の影を早く見たりき

汝、上行

眞の體を現に見たりと

讚嘆あれば咲きに咲く

花の薫は時を分かぬ

四時の春をくゆらかし

久聞なき世を知らず

會座の羅漢は華を摘み

手に手に大士に奉る

梵天は妙華を降らし

寶光天は薫風を送る

そが中に舍利弗は

天を仰ぎて寶塔を

あまたたび禮拜し

丹誠を籠め云ひけるは

あはれ菩薩

日の本にいでさせたまひ

憚りもなく妙法の

大事を説かせたまひしに
國はいかなる布施をもて
その説法に應へたりしぞ

思ひいづればその昔
耆闍崛山の法の場
止ねと喝せし御聲の
歴然として浮ぶなる
わが疑の司のこれり
善に報ひし惡のありきや
然なり、然なり

わが行先は杖木の風
瓦礫の雨に瑞を示す
度度の遠流はおろか
頸の座にもつきたるかな
これ御經の功德ならめ
東條の太刀風や
血は葉末を染め
痕は頼に残る

空にのたうつ山浪の
小高き峯に坐をしめて
覇者めかしたる似非法師

妙高の秀を知らぬに
吾が山を尊と誇る

あはれにもにつくしや
涙は落ちて怒と化しつ
禍なるかな人人
ただ誠なれと語るに
金句あやまたず
先づ生所を追はれぬ

小町の辻に法を説きては
松葉が谷に庵を焼かれて

木間を忍び崖路をわたり
小猴なごに養はれては
土穴の中に餘命をつなぐ

さるが上に
鎌倉に叶ふまじき
仰ありて舟に乗せられ
折からの追風なり
帆をあげて出でんとす
日朗は聲をあげ
あさましの曲事さう
罪なきを伊豆に透ひて

なほも國を亂すにか
人人留めたまへと
纜にしかと取りつく

しやつばらの何すと
權もてはたと打つに
右の腕折れたり
遠さかる船をしぬびて
左手はかへせと招げど
囚人はかへりみるのみ
涙を載せて伊豆に近づく
汐干たり磯の上を

わたれよと言ひ棄てに
風戀し舟人は
すすろきて走りかへる
鶯にあらで鶉にあらで
組板岩に人の在すと
小舟漕ぎよせ彌三郎に
危かりし際をたすかる

睦月始に梅の散る
伊豆とかはりしさみしさや
佐渡が島根は北海の
氷雨は肌をおのかし

團雪は骨を碎く
簀をかづきて明す夜に
思ひで多き頸の座や
頼基は馬の口に
絶りしままに片瀬に著く

忝なくも御經を
説かせたまひし朝より
經に捧げし命なし
うれしや日蓮先驅するわと
高聲にうちわらひ
刃をまてば風雨來り

光りもの空をわたる

いかにしてかありけむ
此島に渡されし
島守は飢渴して
しかもなほ題目を絶たず
露の身はいふにかひなし
妙法を虐げつる
現當の験はさそ
内界の叛逆難
他國よりは侵逼難
常なることに驚かされ

早船にのせられし
立文は配所に下りぬ

聞くごとくに驚嘆の
涙を垂れし聴聞衆
尊者阿難はたちあがり
喜ばしさを、けふこの日
閻浮在世の説法に
ふたたびあへる心地して
多聞に塞ぐ我耳に
新らしさを加へしよと
なのりたまへば上行の

面はゆげなる御相や

膝をすすめて阿那律は
かの日本は法の流
あまねくそご大海に
うかべる神の國ながら
さすが多怨の御經とて
種種の留難を身には讀みしか

今はさて妙花妙果
ところ迫きまで亂れさき
この御山を其儘の

豊葦原のなかつ國かと
聞得て好しと愛でられう
心構へも否といふ
答に膽を挫がれぬ
何故さうと八重問へば
御在世はいかにと復す

三界の主、南無釋迦世尊

梵音聲を轟かし

廣長舌を出したまふも

法華の聽者は怨を抱きぬ
いはんや日蓮末世に入りて

宣傳流布を遍くしうべき

これは唯下種に候ふ

肥たる土には種を植ゑたり

疲たる畑には種を投げたり

南無妙法蓮華經と

かの寶塔を拜すれば

塔の中より御聲の

玉をゆらがす許なるが

下種なるかな

芽を發するも下種の得

花咲くも下種の得

實るもまた下種の得

六萬恒河の砂よりも
雲集の菩薩に先だちて
いしくも法を説けたまひし
法の魁末法の
大導師の旋りしに
満悦の聲、降魔の関
題目を誦すべしと
仰に菩薩天部龍王
異口同音に唱題す
世尊は金手を差延べて
さざと招ぐに上行は

やをら御座をはなれたまひ
足下に雲を踏起し
多寶の塔に近寄れば
この峽の間、かしこの端
霞は昇り、霧は立ち
舞ひつ、動ぎつ、燦きつ
百千萬の會下の衆を
推包みたる白雲の
不斷の雪に紛ひては
高嶺は寂とかがやけるかな

地獄の巻

地獄の巻は開巻、十王、八地獄、結巻、合せて二十折より成る、
ここに出だせるものは、十王のうち第五なり。

罪人 右近、庄司登場

右近

冥さかな 闇さかな

佐渡の金山の底とて

ここにたぐへば白晝のどとけむ

盲人杖をうしなふとも

心の燈に道を行くべし

業風は智慧を拂ひ

業火は脊力を焼く

なほしも君とただふたり

行くにいささか頼まるる

庄司

かばかり重き罪咎を

五尺の髪膚よくも荷ひし

五官王の告命には

あまうし刑と追れたる

闇路の果は何處ぞ

右近

よし罪業は重くとも

いま身に享けし苦しみに

比ぶれば爪上の塵
報の量は世のことの
千倍萬倍不可計倍
かほどの呵責に露の身の
消えやらぬはいぶかし

庄司

あな暗や
前後左右を辨へず
地を這ふて進まんとすれば
石かせ狼籍とびめぐり
立つも立たれず、居るも居られず
颯風にただよふ小船の

海妖を見る心地かな

右近

礫のしぶき石の浪
痛や、たへがたや
翼をもとめて飛鳥をうらやむ
はかなさを誰になげかむ

庄司

なけばとて苦の
なに軽からう暗穴道
曉もおぼえねど
七日の時も来るらむ

右近 やがて逢ふべき牛頭馬頭の
呵責のさまをおもひては
足踏まりてすすみがたし

庄司 かへらんに道もなし

業因吾曹を導けば
遁れんこともかなひがたし
見よ青き火の力なげに
平家螢のやうなるが
かすかに見ゆるはなにやら

右近 君は螢とのたまへど

われ彼の光をのぞむとき
胸さわがしく心うごき
澤邊にひそめる蟒蛇の
雨の眼をみるがごと

庄司 いな、この暗さをやぶる望

時にとつては正に是
龍神奇特の獻燈か
われは飽くまで便りとなさむ

右近 ともなひたまへ庄司の君

二人

よしそのかげの女鬼のごとく

青しといふも光なり

あるひは悪をやぶるにわらずや

地獄の桎梏を除くにわらずや

光は次第につよくして

君か、汝か、七日を過ぎて

始めて右近汝を見たり

庄司の顔のめづらしやと

いふにも落るなみだかな

脚下をはしる石の弾丸

獄卒一

門を開け、門を開け

けふもまた娑婆の鳥澁が

身に負へる業はたさんと

やうやく静静なれども

心はわぎぬ地獄の道

くるがねの牆たかくして

縦横六十由旬

人間の地を距ること五百踰繕那

閻魔王宮の額うちたるは

恐ろしやこれ娑婆にてきける

息諍王の宮居よな

愚癡の數をくりかへさうぞ

同二 地獄の空は闇黒ながら

悪のみはいちじるく
明くるも暮るるもわいだめの
なさが中にも明らけし

同一 見ずや雙の同人頭

憧のうへにたら
白きは善を見、青きは悪を見
襦袢のそもそもより
臨終のいよいよまで

母の乳房をいためし罪惡
父の強諫をそむきし積罰

同二 わけてなほ恐ろしきは

正法を言りし重罪
我等とて身の毛もよだつ
げにや千里を隔てしこまで
責になく聲のあはれさ

同一 同人頭奏すれば

地を這ふ蟻の舉動
花に宿る黄鳥の
囀るまでもくまなし

目二 淨玻璃鏡に照すときは

衷心の底のおくまでも
うつりうつらふ奇特かな

一、二、あな雷のなるがどときは

大王既に出御と覺ゆ
御聲のすさまじさよ

閻王けふもまた應にいでて

つみんどもを責むるか
悪といふ悪をかさぬる

人間のおるかさよ

肉身はとり繩を

逃るるとも心の綱

十重千重にからまれば

安きこと刹那になし
それは夢現の娑婆のさま

犯せる罪科はかくれなし
輕重の罰毫もたがはず

浮世の陰惡ここに報を
見せて世上の科量を正さむ

いかに獄卒罪人を
廳前に引据ゑよ

獄卒一

畏つて候とて

鐵の中門ひらき

額の一眼乾と開けば

二人の亡者手に手とりて

なにを嘆くぞ己の罪の

己に來るが悲しいか

御前に來れと襟髪とらへ
ふたりを片手にひつさげて

投ぐるがごとく廳下に据ゑたり

庄司

恐るしや御姿

娑婆にて聞けるに違はずして

狹丹塗の御顔面

右近

御眼の光はするどに

日月をかけたるごとし

庄司
あはれ大王ねがはくは
我等をたすけて給ひたまへ

右近はかなき我をあはれみたまへ

國王言ふを休めよ

享けがたき人身を享け

遭ひがたき佛法に値ひ

過去の果報を保たむ意な

あたら失せさし己等よ

いかに人人慾に耽り

慳貪に惜みおける

財寶はなど身にしたがへぬ

雨にうたせし風をいとへと

養ひし妻子は

いまの汝が苦にかはるとか

世にそむき心にそむき

惜みし詮は何處に

庄司華嚴の壺に立つ

御聲の威あるにいかで

瀧口より漲りたる

道理に恐れ漂ふなり

國王汝の一生つぶさに聞け

こは汝等と俱に生ひたる

俱生神の鐵札なり

右近 おそろしや鐵くろがねに
我等の日記にきを鐫えれりとや

國王

善ぜんは金紙きんしにしるされたり
惡あくは鐵札てつさこれをとどめて
汝なれらの冥府めいふにきたるを待まちつ
見みよみよいか
善事ぜんじは爪上つまじやうの塵ちり
惡業あくごふは恒河がうがの水みづ
地獄ぢごくの火ひは舌したを吐はきて
なれらを吞のまむとまぢあへり

大叫喚だいけうゑんの炎ほのほに行ゆけ
鑊かくなへには銅あかがねの湯ゆ
玉たまをたぎらし火焰くわえんを放はなてり

右近 恐おそろしさよ、悲かなしさよ

御慈おんじ悲ひあれや讀よませたまひし
罪業ざいごふはさはなれども
知しらずして造つくりし罪つみ
惡あしと思おもはで爲なしたる業ごふ
唯願ただねがはくは許ゆるしたまへ

國王 其身そのみの業ごふを知らざるや

冥府へきたりし目前すら
 妄語、汝は犯ししならずや
 娑婆の悪口のまつはりて
 邪正を顯はすこの場に
 冥衆を掠むること
 反りて其身に苦を重ねむ
 一生の身の影こそ
 俱生神の鐵札なるに
 見よ見よ現をここに現じて
 汝の舌を動かさじ

獄卒 來れ罪人これを見よ

同二 汝も來りてこれを見よ

庄司 不思議なりや我等の一生

映畫よりも明に
 一代の悪事をさらへて
 慚愧の汗を推流さすぞや

右近 悲しやな、さしも知らじと思ひし陰惡

手には刃は持たざれど
 心に人を殺めし血煙
 口こそ接けね人妻を
 慕思ひおもひしみをかごと

悪事を蒐めて浴をなすとも
まことにこれには及ばじな

獄卒 それそよいかに罪人よ

俱生神のあやまりか

大王の勅たがへるか

朝、夕、夢、現

己の眼のくらきとて

あらはの罪をなどはかくすぞ

閻王 大叫喚の地獄へ墮せ
ただし汝等の眷屬ども

追福を修しもやせん
われも本地は地藏の大悲
閻浮をただちに観せんと
みづから立ちて明鏡の前

右近 よらせたまふ大王の

憤怒やはらぎ見えたまふ

すは、すは、いかに頼あり

偕老の契、戀し妻

供養もさぞや厚かりなむ

後世を祈りて寺寺の

寄進の札も時めきたれば

僧尼の誦經頼むに足るべし

庄司妻はさきだちぬ、子は持たず

人を罵り人を擲ち

佛を禮せず神を敬せず

頼むかひ更になし

閻王右近よ、庄司よ、是を見よ

この明鏡の表を見よ

右近はらだちや、なさけなや

眼を忍ぶ佛禮の

そもそもなにの冥福ぞ

墓參にかざる白粉は

後の夫を釣らうとや

誦經の僧は袈裟の下に

ひそかに布施の數を繰り

多くの叔姪なげきを表に

皆遺物の多少を案ずる

庄司不思議や顔も知らぬ女の

わが新墓ををろがむぞよ

女 一心欲見佛

不自惜身命
時我及衆僧
俱出靈鷲山

自我偈の妙文心耳に徹し
あたり涼しき夏の夜の
水面をわたる風のごとし

庄司知らずや娑婆にありて
一生に一度の陰徳
雲をやぶりし月のごとく
ひとつなれども燦めさわたるよ

女

衆生見劫盡
大火所燒時
我此土安穩
天人常充滿

かの孝養の功德によりて
汝の赴く道湧出せり

庄司こはいかに
われさへ知らぬ功德なめるを

閻王 汝のめぐみし一片の
銀は女の苦患をすくひぬ

女 みなさけあつきかのひとの
のちのよたすけたびたまへ

庄司 めぐみとや、めぐみとや
かかる女はわれ知らず

女 ふたりのおやをたすけたまひし
めぐみをなどかわするべき

閻王 人の手を経て恵みし金は
三人の命をすくひたり

庄司 人の手とや、みたりとや
申すもいたくはばかりの
僕の代をあたへしこと
今にやうやう思ひ出はべり

女 たとへこのみはしちしやうを
むげんのそこにおくるとも
かのきみにさちあらせたまへ

閻王 因果は廻る小車の
いまぞ汝にかへるなれ
あれ見よ善處に赴く道
玉の車の待ちつるは

庄司ありがたし、忝かたじけなし
さらば右近よ、いざたまへ

獄卒爲したる劫の盡させぬうちは

ここにあれ、ここに坐せ
罪の報を果さぬうちは
地獄の墻は踰えさせがたし

右近かなしきかなや呵責かしくの責

六十四萬の年月を
五尺の身軀に享けなんとよ

閻王己を責めよ、己を悔め

柱に打ちたる釘は抜くとも
長久に痕は消えじ

右近恐ろしき報のほど

こも檜山われにいでて
己を焼いたる罪なりかし
我と頭を大地に打付け
紅の涙を流し
足すり手すり泣き居たり

庄司いかに大王へ申し候ふ
 さしも無慚のわれながら
 たまたま爲せし小善の
 功德によりて成佛せんこと
 うれしきことの極ながら
 我れひとり淨土に入りて
 残れる友は叫喚の
 底に迷はば悲みに
 寂光の土も汚されむ
 所詮は人より享けたる功德
 これをその儘右近に轉じ
 かれを樂土に送らせたまへ

女

我智力如星
 慧光照無量
 壽命無數劫
 久修業所得

閻王 善哉、善哉、汝を墮して
 右近を成佛なさしむべし

右近 いやとよ大王
 根を植ゑざる種の生ふとや
 善事は庄司のなせしこと
 われ故にとて罪ならぬが

地獄に陥る法や候ふ
ただ速に我を送り
庄司を早う去らしめたまへ

獄卒

償へる罪を受けよ
いで叫喚の底に入れと
身を起せば其長十丈
庄司をとらへて手毬のごとく
中有を目がけて躍らすれば
不思議や空に光明さし
異香薫じ妙樂聞ゆ

閻王

佛を拜め菩薩を拜せよ
己を苦境に陥いれても
人をたすけむ志は
これ即身の薩陀の悲願
この冠も其前には
玉の光を失ふぞや

庄司

ありがたや今こそ成佛
右近きたれと手を引きて
息諍王を三拜し
いまこそ知んぬ二道の
諍を息むる閻魔王

永離三惡道
惡道なければ地獄もなし

一同冥土も娑婆も同音に
誦したてまつる偈の妙文

每自作自念
以何令衆生
得入無上道
速成就佛身

難風

是は鎌倉方より出でたる僧にて候、我いまだ高祖の御跡を見ず候程に、
この度思ひ立ち、伊東の御靈蹟を拜み廻りて候、是より都へ参らばや
と存じ候、急ぎ候程に下田の港に着きて候、なうなう船頭殿、其船は
何方へ参り候ぞ、なに沼津へ行くとや、さあらば我れをも乗せてたま
はり候へ

潮は清き中秋に
伊豆の大海の船の路
遠は花散り近きはとどろ
高浪はしり礁を打つ

雀の岩に近づけば
指を立てたる奇しさまや
天城風を正面に受けて
神子元の嶼を横に過ぎ行く

海豚は波に躍りあがり
海路の興を添ふれば
船人は艦の間に集ひ
潮ふく鯨の物語す

この泰らけぎ海面に
秋のならひと云ひながら

怪しき雲の一とちぎり
島の間立つたわ立つわ

船頭は騒ぎたて
やれ水夫よ、帆を下せ
石廊へ歸せ仲木に着ける
大海原に入挺の鰯

えい
それ漕げ、まつかせ
えい
やつし、やつしつし

船柄も折れる、腕も抜ける
陸地に着くまで傍目を觸るな
あれ、あの雲の大きくなつたぞ
合點じや、よつしえいしつし

黄める空に雲擴がりて
ざんざ雨、なる神、なる風
長津呂の鼻も隠れて
浪は幾多の小山と化しぬ

雨は礫の板間をうてば

風は曇みし帆を引きちぎり
天上天下一葉の
船を苛なみ勝るなる

舵も勝も用を爲さず
いな人既に力盡きたり
ある者は斃れたり
ある者はうつふせり

帆柱を抱へたるもの
船梁に絶れるもの
親方は艦勝の傍に

空しく舳を睨まへたり
何處へなと引いて行け
水臑も汲むまい、舵も捨てら
磯に中らば骨灰微塵
船の割れるを最期と覺せ

悲みは船を掩ひぬ
死の影は襲ひ來りぬ
風の腕は舳を突く
浪の手は船縁を攔む

洞の間には乗合の

口惜しとののじる聲
情無しと泣く聲の
あらぶる神の樂に和したり

死よ、いまは末期よ
法師在すぞ、引導を
後生の爲めに説かせたまへと
涸れ涸れに口口

げに鈍ましや我れながら
なとて小板を抱へてありし
踏のすべての生命を助くる

扱は身に持つ法師にあなるに

肉身は動かうとも

な恐れそ、最期の大事ぞ

獄卒に將てられて

無限の暴風にな咀はれそ

沙門一人ここにあり

船中の人心安かれ

後世の安くは現世の

難風の恐ろしからう

祈れや禱れ後の爲め

暴びて吹けや東南の

風も強かれ、船も沈め

面面なほも風を祈れ

題目を讀み候へ

龍神恭敬の浪の太鼓に

のれや囃せや御經の

題目を唱し候へ

家も無けれ身も無けれ
風も無けれ、唯あるは

紫摩黄金目前の奇特
十體百體皆是の菩薩

みな同音に誦し奉る

題目の聲ぞ尊き

船こぞりて即身成佛

この世からなる寂光の城

あわこの浪の止まざらましば

地涌の薩陀の員に入り

靈山依囑の譽を人天

十方世界に揚げなんものを

嗟この風の風きたることよ

前世の罪業深くやありけむ

雲間を洩るる日光に

信心難風と共に薄らぐ

始めて佐島を望み見て

(赤倉温泉にて)

そのあさよ
 東明わかき呱呱の聲
 裾野の草も小黒にて
 温泉の客いまだ起出でず
 湯風呂を照らす有明燈の
 かひなき姿を止むるとき
 夜の雲漸く下に垂れ
 戀よ、情よ、人間の

迷さめなと沈み行き
 頸城平を封じつつ
 堤の柳、淀、流れ
 おぼろおぼろに分かぬとき

樋道おくる湯の音に
 静をやぶる寂寥や
 ひねに畫ける北海の
 荒浪やもし見ゆるかと
 風呂より躍り立てあれば
 右よ左よ山の脚
 雲浪紛ふ中空に

ものこそ見ゆれ佐渡が島

一切経を運びたる
疲労に伏せし黄牛か
金粉高く盛上る
鈍色の地の蒔繪せし
佐渡が島こそ見えにけれ

あわ日蓮は捨てられて
上行うまれし彼島に
われ對すれば折伏の
劍の鋒先肝魂に

中れるを覺ゆなる

見よ黄牛は眠さめ
八千岐なせる金色の
角を振るよと見てあれば
東方空に日は昇り
船の帆影は銀色に
望の色を現せり

片瀬の濱に樗牛を思ふ

空見れば星の光は
小胸刺す心地して
ひたふるに物がなしう
浪打際をさまよふ

晝の舞樂のつかれに
眠れる海の静けさ
いまのみそらに同じて
さみしさや島の燈火

世を導けど身は更に
天にもだえ地にさけぶ
暗に起伏す曉に
明明として大聖の
光に我れの影を見つ

今こそ心やすかれと
千里を驅ける天の駒
足にまとへる鎖を切り
鬣ふるひ立ちしとき
君既にあわ既に
病は君を咀ひにき

嗚呼君逝きぬ、君は既に

寂光の土に住して

天人の供養恭敬

安樂菩薩の寶位に坐せんも

闇にまどへる衆生をいかに

あわ君逝きぬ博士の君よ

敷皮の上に日本の

命をつなぎし片瀬の濱に

さすらひてなほ君をおもふ

附録

松の歌

茅ばかりなる丘の上に

一本の松の老たるを

里人あがめて神繩を結ひたる

そもその様をたとふれば

金春大夫「翁」を舞ふか

差枝引枝法にかなひ

そよや千秋の曲

どんどや萬歳の曲

一の眞は天に秀で
二の行は地を抑へ
三は走りて水を飲む
渴せる龍の姿あり

月の夜は烏を宿し
自然の文をうたはしぬ
朝日に鶴の巢立して
聲九天にいさぎよき

ある時は冬のあした
腕に萬斤の雪を擔ひ
たわわに力も折れてんげるを
袖うち拂ひて縁を現じ

ある時は秋のくれ
巖を劈く黒風に
額つく諸木を嘲笑ひて
苦苦し氣に旗を守りたる

曲れる幹は梁の
用なきにこそ壽命あれ

墨尺に外れし枝ふりは
たまたま千歳を過こしたり

老木益す精を得て

竈に煙ともならず

緑を枝に加へては

斧に生血を絞られず

晝も眠り夜も眠り

揺がず動かす盤石不動

春を迎へ秋を送り

傍目もふらず東風西風

生けるか死せるか我が本性を
知らまく欲さば八九の荒どき
二百十日の雨土壌を
風おびやかす夜半樂

東風ふきこめば髪そらさまに

虹にまたがる阿修羅吉王

黒龍かけりて天に騰る

蟠れば地を捲ひ

翻れば天に跋る

青き角黒き胴
鱗あざやかに爪するどし

あなづる者には威厳を示し
恐るる者には和容を見す
われ劫初より芽生して
二千餘歳の星霜を経ぬ

八ヶ嶽賦

八の冠を頂ける
八ヶ嶽こそ尊けれ
冠の襷積の深谷に
濃きは縦の葉白檜の葉
神代のままの白雪は
尾上の空にかがやきて
天の賜寶石の
くしき光をはなつなる

朝姿を松原の

湖に映して朝化粧
形正して見ゆれば
四方の山浪次第して
拜をすすむる鼓の音
山おろしとぞあやまたる

夕くれゆく日を送り
諏訪の湖水をうかがへは
さざなみ動く御鏡に
風狂じたる華の櫛
蘆間にうかむ鬢の
きゆると共に霧こめて

夜の幕深く入りたまふ

諏訪の平は君がため
曉おそく夜の衾
かづくに馴れぬ新妻の
盡させぬ恨なかるべく
念場が原の老人は
枯野に燈さりがけて
夕日かくる酉刻
ひとり寒さをかこつらむ

春麓より推寄せて

花の伏勢鬩を揚げ
霞たなびく時しもや
百木の若芽若草の
肌やはらなる廣野はら
綿津見に立つ蓬萊の
山とも見ゆれ八ヶ嶽
八の冠をいただきて
御稜威を四方に顯しにける

烏龍嶼

(伊豆國極南なる海中にあり)

玉を砕くがごと
席を捲くがごと
小山の動くがごと
浪は烏龍嶼を掩へり
日は落ちたり
風は強かり
大洋は森漫として
片舟の影だになし

強き風に浪のうねりは
岩の谿を襲ひつ
醜のいはほよ
我れは汝をやすらげん

打寄する水の力は
げにかの巖を削るかいなか
凹み、とがり、間なき面は
正義を守る孤忠の志士か
かぶとをそのまま岩の形

眠れる獅子に似たる姿は
いかなる潮も
亡し得べきや

國難たとへ旦夕に迫るも
國民あげてかくの如くば
よしそれ世界を舉らば舉れ
鍛ひに輝く鐵はこの岩

自然の衣

霞の浦に棹さして
筑波の峯を見てし時
春の朝は紫の
霞の衣を着たりける

もしそれ夏は富士の根の
頂近き石室の外
月は礫砂に寒きとき
白き御裳ひくおん姿

落日光りうすらぎて
櫺の紅葉のいや赤き
水澄みわたる男體の
麓の海に青き影

山國川のほとりにて
淡雪降りし夕の道
暗き刹那の岩影に
黒き衣を闇に見し

寶船布く初夢に
飛驒の山路に迷ひては

白水の瀧澎湖と
見よ萬丈の絹を懸く

淺間の煙渦巻きて

光を掩ふ夕暮は

珊瑚を溶きて塗れるごと

かれの衣は赤かりき

誰が針妙や汝が裳は

日に新たに日にあらた

時の垢にも汚されず

望の薫ときめきぬ

塵に染む世のうき人よ

彼の姿をかいまみて

彼の恵にうるほへや

自然の衣は輝けり

あゝそれ男子劍に杖り

横行萬里彼を追へ

孤舟棹さす大洋に

かれの新衣は藍滴らんとす

盲

盲の身こそ悲しけれ
あつきによりて光をしぬび
にほひによりて花にあこがる
ただそれひとり音曲の
妙なる聲に慰みて
浮世の命ながらふる
つくりがたりを人に讀ませ
耳さしむけて聞いてあれば
喜しさやあはれさや

悲しさ、つらさ、勇ましさ
世のさまざまを思ひては
待たれよ、しばし今一度
讀みかへしてとあつらへぬ

すさびなきまま四の緒に
平上去入のさまざまを
静かに急に調ふれば
げに我ながら感に入り
ほとけも神も世もなけれ
はた喜びも悲しみも
我身も人もなかりけれ

わあ歌うたふ口もあり
絲を調ふる雙手あり
鳥の囀書よむ聲
耳うとからぬ身をすれば
なとて涙のただひとつ
この見えぬ目に残りにか

吸筒

ああ暖氣胸にあり
呼び活けかへせと聲を限り
力なき目を開かしむれば
潤ける口を指さしつ

『力』なるかな『死』なるかな
汝はいま我が敵にあらず
いかで惜まん一掬の
水は甘露の大導師

安らけく去れ敵の兵
修羅の苦界もただ吸筒の
惠によりて臍氣に
寂光の土を胸に描くか

まだ見ぬ藤のさかり

今は枯木に似たれども
春長け五月水の面
紫うかむ夕つかた
たとはば美女のうつむきて
襟足長く延べしごと
その英の垂るるとき
いかに榮華の盛を極め
驕慢相を見せつらむ
年の始の客人は
春に憧がれ色を戀ひ

いつ年々に契れども
人事しげきはこの藤の
はびこるさまの如くにて
つひにまだ見ぬ藤のさかり

われのみ古し

もの皆は新らしく
翳き子は檜の香に酔ふ
柱には鉤のてり
苔つかぬ土のほひ
心して障子ひらけ
強き日は壘を攻めら
床による古き主
そのままの姿常磐樹

劍のかげ

劍を抜きて舞ふかげの
障子へうつる火の光
知らぬは友を斬ると見む

人愕けどわれ知らず
なほ振る太刀にはらつきて
肝を冷さは笑ふべし

君よ隔をとりはなて
我等は共に酔じれて

春を惜める一夜のうたげぞ

燕

親おやにひ率ひられてこ兒こつとばとくららめ
南みなみのうみ海うみををわわたたる

疲つかれれ落おちちては羽はああるまままの
南みなみのうみ海うみににううををとと化りす

春はるははるる毎ごとにに親おやつつばばくららめ
南みなみのうみ海うみををよよぎぎれれど

ああとと追おひひ兒こをを見み知しららぬぬくくややししさ

南みなみのうみ海うみののととびびののううを

舟は焼けたり

わが故郷は海の上
産屋はひろき空の下
舟にもあれば新潮を
汲みて産湯となしにけむ

海中に舟は焼けたり
古きもの煙と散す
新らしき香を慕ひて
潮路に里垣つくらむ

盲の妻

めしひの妻美し
媚態好と人讚すれば
誇りがに夫はよろこぶ

めしひの妻うるはし
化粧長く朝戸をいでず
誰のために然はつくるぞ

盲のつま答へぬ
人言を鏡にたのむ

夫ゆるにかたちづくりす

里ばなれ

人はこぞりて我を賤しむ
うからも無く戀も無き
この里を去らんかな

かぞいろは御墓に眠れり
わが影のみが友なれば
相伴ふていでや去らん

里放れ鐘の聲す
わが名残はただこれか

稻の穂に露宿れり

むしろ地獄に

彌陀の敵ぞ放逸ぞ
進めば極樂に入ら
一歩の後は地獄の火の
燃え立つを知らじか

名號の旗の下に
立ちたる僧は言る
親とて、主君とて
信心なきは佛敵ぞ
宗門の外護の役

命いのちひとつ奉たてまつれと
攻せめよする勢いきほひは
さながら猛みやうくわい火の焰ほのほなり

三みつ葵あひひの旗はたはなえたり
金きん扇せん光ひかりうせて動うごめく
わはや主しゆの元もと康やす
この原はらに消きえたまはむ

思おもへば、主しゆ君くん、後ご世せ、忠ちゆう義ぎ
忍しのびがたわが心こころ
盡じん未み來らいまで苦くを受うくるとも

この様さまを見みるは憂うれし

いざ來きたれと總あひ角かくを
引ひかへして大おほ音ねに
われは無む間かんに落おちなむ
心こころがはりし土つち屋やと名なる

五ご騎き三さん騎きのつはもの
惡あく業ごふと聲こゑかけて
槍やりあはせはたはたと
穂ほ長ながの薄すすきひらめく

土屋は斃れたり
敵にしてまた友垣なる
数の勇者も斃れたり
闇は静にすべてを掩ひぬ

木曾殿

三井の鐘は湖をわたりにて
入相を告げて行く
霧立ちて小波の
汀によする聞こゆ

折から栗津野の
塚の中に聲あり
兼平やある

さかにや四郎

おびただしき人馬のどよみ
瘦せ男老いたるは
様かはる修羅の勢や
搦手の大將軍か

吐く息にほと火を吐きて

今井のいふ
業の戦ひまなければ

おん見忘れも理

一夜宿直の法樂に

うしろ合せとすさみつる

芭蕉てふ俳諧の師

冥路へまかる難波津の
門出を送る人數なれ

あららげの鬼聲に
しれもの、さておぞの

しやつ原なるかな

忝なくも義仲

清和の系圖正しう

聊か世に知られたり

業つくり修羅道に
沈みては日夜の責苦

関の聲矢叫びに
 小休とてなけれど
 勝つときの心地よや
 足を貫く鐵刀の
 痛さも忘れ
 降りかかる輪棒の
 苦みも思はず
 わざくれ歌の師匠
 さかしら顔のにくさ
 ひとあふりあふらうやと
 云ひさまにちらり煙の

ちかると立つ見ゆ

兼平云ひけるは
 よしなのこと敷島の
 歌の道は高し
 匹夫にして三千の
 師となりし彼れ

はかなき武名の
 いつをいつまで残らう
 國亡び跡朽ちて
 幻は草に残りぬ

止まりたまへと振絞る

しはがれの音聲

團團たる篝火

やうやくに明きは

すはや修羅の時刻よ

今夜の敵は誰そ

ものものしと武者づくり

兼平きたれとさし招ぐ

哮びこゑえいえいと

夜嵐にまぎれて聞こえし

頼朝落馬

橋の供養もはてたらむ

都鄙遠境の男女老若

業風水を襲ふがごと

算を亂して渡るゆり

橋の奉行稻毛の入道

警固を具して送りまをせば

殿のおん顔晴やかに

鹿毛なる馬上にみえたまふ

六十六箇國の守護地頭
右大將頼朝卿
薄色の狩衣に立烏帽子
腹巻の綿嚙僅にもれたり

馬上しづかに打たせつつ
後を見れば甲斐に連なる
千山の峯たひらかに
富嶽のひとり聳えたり

その麓より流れては
石を轉ばす馬入の河に

渡せる橋は夏の虹の
地に這ひかかると疑はる

千僧の供養既に終り
渡橋の式も済みたれば
今日よりながく諸人の
たよりとならむ海道や

君の威光の強ければ
さしも難義の水勢も
流れをゆるめて杭を守り
水嵩を減て浅みを作りぬ

重成おほせをかしてみて
落慶の式首尾を全う
諸人の賞美を蒙むるも
ひとへに君の恩徳なれ

あれ御覽せよ結縁に
巫女、船人、陰陽師
番匠、商人うちつれて
誓の橋を渡るなれ

頼朝これを聞こしめし

否とよ吾の威勢にあらず
頭には萬乗の天子
肩には宗家の神まします

さばれ入道の辛勞
褒美にたえたり
欄干に鐫たる奉行の名は
末代迄の名譽をあげうぞ

分に過ぎたりおん言葉
かへすがへすも君の恵と
鎧の袖を地につけて

ぬかづき恐れかしこまる

夕陽に映る金物の

ひかりもきらびやかに

眼を射れる馬入の河原

いざ還らなむ重成さらば

相隨ふ扈從の輩には

北條四郎時政

和田小太郎義盛

畠山次郎重忠

梶原平三景時が
嫡子の源太、次男の平次と

親子三人うちつれて

時めきたるに引きかへて

やうやく忌をはなれたる

土肥の小冠者遠平が

すがたを見ればあはれにも

いたましくこそ見えにけれ

大江廣元、千葉介
比企の判官、安達藤三

比企の判官、安達藤三

御前の前後をうちかこみ
或は水干、或は素襖

精好、紋紗、練平絹
萌黄、朽葉、木蘭地
春、前栽の花園に
百花みだりに咲るがごと

時しも頃は建久九年
霜降る冬の末なれば
満目荒涼ところどころ
霧にまじはる人屋の烟

晝の白衣をめしかへて
一の位の紫紅の御衣
わが富士西に覇をなせり
東に行くは天下の將軍

虎の尻鞆厚總の
鞆の朱、鹿毛の駒
ああ日は西に月はまだ
宵闇なるべき空の色合
姥ヶ島を右手にみて

入^り的^どヶ原^{はら}をすぎゆけば
思^{おも}ひぞいづる陸^{りく}奥^{おく}の
胡^こ沙^さふく景^{けい}のしぬばれて

小^こ松^{まつ}おひたる砂^{すな}原^{はら}に
去^こ歳^ぞ一^お昨^と年^{ねん}をくりかへし
むかし思^{おも}へばはるかなれ
亂^{みだ}れそめにし平^{へい}治^ちの世^よ

待^{たい}賢^{けん}門^{もん}の夜^よ軍^{いくさ}に
白^{しら}玉^{たま}椿^{つばき}八^{はち}重^{じゆう}椿^{つばき}
色^{いろ}を競^{きよ}ひし源^{げん}平^{へい}の

修^{しゆ}羅^らの巷^{ちまた}ははかなけれ

青^{あを}墓^{はか}の宿^{しゆく}にして
平^{へい}家^けに捕^とられおめおめと
心^{こころ}にあらぬ都^{みやこ}いり
名^なも鬼^{おに}武^ぶ者^{しや}の昔^{むかし}より

海^{うみ}ごし見^みゆる天^{あま}城^ぎの嶺^か
伊^い東^{とう}に飄^{ひら}らひ江^え馬^まに忍^{しの}び
平^{へい}氏^しをねらふ年^{とし}月^{つき}に
いかにか今日^{けふ}の榮^{さかえ}を期^こせん

片瀬の川を越えゆけば
浅瀬にかけたつ蘆のまに
葦割子啼くもいと寂しう
風寒くして肌あはだつ

一叢木下駒をとどめ
つづける人を見てあれば
いづれか郎黨家の子の
金吾を託す人や誰れ

かの福原の浄海が
榮華も下る檀の浦

はかなく沈める一門の
さすがに人は多かりき

長門の國は早鞆の
うら浪いかに繁からむ
鬼となりつる平家より
おもへばあはれ弟の

範頼を誅せしは
かげ見て吠えし犬のごと
恨をさへにいひはてで
かへりし波に似たるかな

駒の蹄を洗はせて
浪うちぎはに散る貝の
螺鈿を蹴たて腰越の
津村はすぎし文治の春

根ざしは深き謀叛の
後には宗家をうかがはむ
義經をせきたるは
この濱にてありけるよ
よき事したり彼を世に

その儘おかば末終に
榮華はうきに相模河
けふ安穩にわたり得んや

音無の瀧おとなくも
水はながるる人ごころ
梢に風なくいかにして
松の籟聲を聴きうべき

おう！駒の足搔の早くして
ただ我れひとり稲村の
崎に上れば海昏く

江島の影も見えわかず

海霧ふかくたちこめて
春ならねどもおぼろおぼろ
濤のおとも静けさに
我名を呼ばふは何者ぞ

なに源の義経とや
推参なり九郎
舎兄を討つ院宣の
乞ひうけたるは何故ぞ

白白し胸に聞けとは
汝が謀叛かくれもなきに
亡びしは自業自得
討つたるは理の當然

行家！おのれが！
證人呼はり奇怪！奇怪！
共に鏑をむけたる汝が
下れ、しされ、寄らば切んず

義廣とや範頼とや
上総介廣常とか事事し

天下に覇たる頼朝が
行路を遮る所在なをかし

柄に手をかけ睨まへば
雲霧かくれ見えわかず
簾越の梅花のごとき
海上の人の影

白金の鍬形つけし鉢巻し
白絲絨の鎧きて
雪をあざむく白馬に
昔ながらの武者ぶりや

酒に漬けたる陸奥の
壺のなかより引いだせし
面影をそのままに
さしも無念の形相や

中啓あげて鞭にかへ
鹿毛を叩きて責むれども
ひとつところ躍りては
足弱車の前にも進まず

敵はこれを見るよりも

白木の弓に白羽の矢
弦は満月矢は流星
切て放せばあやまたず

乗つたる馬の太腹を
射付けらるれば高嘶さし
をどりあがれば遠近の
雲はれ月はかがやきぬ

北條梶原畠山

こはいかに大將殿の
御落馬ありしと馳せよりて

介抱申し助けあげ

面面駒の口とりて
威勢は空に星月夜
鎌倉山の御所のうち
帳臺深くいりたまふ

明治十四年五月三日印刷
明治十四年五月六日發行

著者 山崎紫江

發行者 戶田直秀
東京府下荏原郡品川町利田新地六番地

發行所 左久良書房
東京市神田區富山町十八番地

印刷者 高塚慶次
東京市京橋區弓町二十四番地
印刷所 三協印刷株式會社

一冊金拾六錢
送費金六錢

